

No.27

2023.3.1

◆編集・発行：  
ネットワーク・市民アーカイブ

事務局

〒189-0012 東京都東村山市萩山町 2-6-10-1F  
tel・fax：042-396-2430

E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp

◆正会員 1口 6,000円、賛助会員 1口 3,000円 / 年  
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226  
口座名：市民アーカイブ ※団体会員 2口～

# アーカイブ 通信 No.27

## 表現を「自分ごと」に開く —アマチュアの自主出版物を展示すること

町村悠香

(町田市立国際版画美術館)



美術館は基本的にプロの美術家や、美術史を代表する作品を展示する場である。しかし筆者は広義の市民活動資料である、アマチュアによる自主出版物も展示品に加えた展覧会として「インプリントまちだ展2020すむひととくくるひと」「アーティストト」がみた町田(20年)、「彫刻刀が刻む戦後日本 2つの民衆版画運動」(22年)を企画してきた。アーティストに限らず「誰もが表現や発信の主体になりうることを、美術展のなかで示したかったからだ。

でもらった。20年の展覧会は集大成として、3年間で生まれた作品を再構成し、さらに町田市がホストタウンとなったインドネシアから、新たにアーティストのアグン・プラボウオを招聘し、作品を発表してもらった。

一方で美術館の招きで外から来た者の視点だけでなく、内からの視点も反映させるため、町田出身・住民だったアーティストや、町田や周辺で作られてきた市民の自主出版物も展示した。

### ●インプリントまちだ展

#### ▽市民の自主出版物を展示

「インプリントまちだ展」は20年のオリピックに向け、17〜20年に開催したシリーズ展だった。17〜19年は、版画を軸に制作する若手アーティスト(ながさわたかひろ、荒木珠奈、田中彰)を招聘。過去の代表作を展示するとともに、町田に取材した新作を発表し

自主出版物は過去に発行されていたものとして、1981年に創刊したミニコミ誌『でんえん』(11号・84年8月、町田市立文学館所蔵)などを紹介した。『でんえん』は当時山崎団地に住んでいた主婦が立ち上げた。遠藤周作ら地元の人や市民グループ、女性の社会活動、地域に新しくできたお店など、バラエティある情報を紹介していた。創刊号には「一つの街

### 開館9周年記念集会



## コモンスペースをつくる

～市民アーカイブ多摩を軸に～

2023年6月4日(日)午後1時30分～

講師：岡部明子さん(東京大学・建築学)

市民アーカイブ多摩は、資料の保存・閲覧場所でもあり、人が集い語り合うスペースとしても、多くの方をお迎えしてきました。資料も増え続け、新たな場所づくりが課題になってきています。これから私たちは、資料や活動を共有していく場としてどのような「コモンスペース(公共空間)」をつくり続けていったらいいのか。住民主体のコモンスペースづくりに具体的に関わってこられた岡部さんにお話を伺います。

- ・会場：市民アーカイブ多摩(玉川上水駅歩)
- ・参加費：500円(会員無料) ・要申込



「インプリントまちだ展」カタログで紹介したフリーペーパーと発行者アンケート

フリーペーパーとしては『玉川つばめ通信』、『国マガ(こどもの国系情報誌)』、『ラ・ガゼッタ・デロ・マチャダ』を展示した。こちらについては発行者にインタビュー、アンケートも行えた。彼らのモチベーションは、表現欲求の発揮や所属するコミュニティに貢献することにあるようだった。変化が生じる時には、社会的な問題提起がなされている号もあった。

一つの雑誌。商業都市から一歩進めて文教田園都市へと歩いている町田。そこには創り出すエネルギーの模索があります。でんえんがそうだと思います。町田の市民誌になればと思います」とあり、町田市の文化行政に携わっている筆者は襟を正される思いがした。

たとえば『国マガ』は、東急こどもの国線・こどもの国駅周辺に住む仲間と13年に創刊し、現在も発行され続けているフリーペーパーだ。漫画家を目指す者や駆け出しの編集者が集まって結成され、実際に漫画家デビューを果たした者や、今も編集者として活躍する者もいる。創刊時は地元ネタから始まり、現在は

メンバー各々の表現したいことを連載している。置かれていたのは駅の近くのコンビニや喫茶店などで、毎回印刷した600部がはけていくという。

もう一つ、『玉川つばめ通信』は、玉川学園駅の近くに住む宇野津暢子さんが15年に創刊して、現在も続く。東日本大震災をきっかけに、自分が住む地域の助け合いに目を向けるようになり、地域情報を発信する活動を始めたそうだ。デザイン性だけでなく、高齢者も意識して紙で発行することにこだわっている。協力してもらえるお店や個人に5部550円で買い取ってもらい、制作費を回収して継続的に発行できる仕組みも興味深かった。

▼次の展示に向けて  
フリーペーパーを店や駅など街に置いたり配ったりするためには、その場所を管理する人と関係を築き、交渉する必要がある。日本はグラフィティやストリート・アートに対する規制は厳しいが、「公共空間のなかでの自己表現欲求」は、こうしたかたちで発露されているのかも知れない。

本展の準備は、次の「彫刻刀が刻む戦後日本」展の調査と並行して進めており、戦後版画運動の調査で得た関心を、現代に向けてみようとした部分もあった。ただ、振り返ってみる

とこの時は、私個人は関心があるものの、美術展という場ですらうした自主出版物が来館者に受け入れられるのか、不安な気持ちを抱えつつ展示してしまつた。友人の学芸員から、自信を持って、もつとのびのびと資料の魅力を引き出すディスプレイや展示空間づくりを考えた方がいいと指摘され、次の展覧会に生かしていくことになった。

### ●彫刻刀が刻む戦後日本展

▼2つの出会いから  
こちらの展覧会は、構想から約7年を経て実現した。構想のきっかけは2つある。最初は2015年に「野に叫ぶ人々 北関東の戦後版画運動」展(栃木県立美術館、00年)図録を読み、関心を持ったことだった。翌年、今の職場に就職し、



当館に関連するコレクションがあることを知り、展覧会ができる可能性があると考えた。  
2つ目は同じ頃、道場親信『下丸子文化集団とその時代 一九五〇年代サークル文化運動の光芒』(みすず書房、16年)を知ったことだ。戦後文化運動研究の進展を知り、この成果を生かして戦後版画運動を調査すると、新しい知見が見出せそうだと思つた。ちなみに、道場氏の著作を知つたのは家のリビングにたまたま置いてあつたのがきっかけで、それは市民アーカイブ多摩の運営委員として、父が道場氏と一緒に活動していたからだ。こうした出会いに導かれ、18年夏に研究会を作り、調査を重ねた。  
▼版画運動の奥にあるもの  
この展覧会では中国木刻運動のインパクトから始まつた「日本版画運動協会」と「日本教育版画協会」の活動を軸に、前者による戦後版画運動、後者による教育版画運動を紹介した。「日本で多くの人が学校で体験した版画作りからは実はリアリズム美術の系譜を見出すことができ、その奥には社会運動・平和運動の軌跡がある。さらには魯迅の中国木刻運動に遡ることができるといふ、これまでの美術史で脇に置かれてきた流れを提示した。  
自主出版物としては1950

年代に労働者や地域の有志が作つた全国のサークル誌、小中学校で50〜90年代に作られた版画集、版画文集、版画絵本などを展示した。特に後者について、幅広い年代の方から「懐かしい」という声があり、「まるで自分が作つたもののように、懐かしくて涙が出た」という感想が少なからず寄せられた。学生時代に作つた版画文集が展示されていることを知つて、岐阜から来てくださつた80代の方もいた。

### 市民アーカイブ多摩の四季⑬ 春 コブシ

樹林地の真ん中にある大木のハクモクレンに主役を奪われ、影は薄いが、満開時には武蔵野の里山の面影を思わせる。立川の「市の花」でもある。



里山の雑木林の緑がまだ眠りから覚める前に、白く霞むように咲き始めるコブシ(モクレン科)。よく育つと高さ8メートルぐらゐになります。近くに寄ると、白い花の付け根が少し紫色を帯び、その脇に黄緑色の葉がついていることで、山地に咲くタムシバや、庭木として植えられるハクモクレンと区別がつけます。中国ではずつ



と以前からこの仲間の花芽を「辛夷」と呼び、薬用に使ってきました。中国から本草学を学んだ日本ではコブシやタムシバを辛夷と呼び、その花芽を同様に薬用に使っています。  
(邑田仁・むらたじん)  
元東大小石川植物園園長

▼誰も表現・発信の主体に  
この展覧会は戦後版画運動と教育版画運動を連続的に紹介する初めての展覧会として注目され、メディアでも大きく取り上げられた。そして何より「誰も表現や発信の主体になりうる」という、企画の意図が伝わったことが来館者の反応から実感できた。こうした声を胸に、今後も市民の表現や活動の軌跡を美術展で紹介していきたい。  
(まちむら・はるか)

# ニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信(ミニコミ)を、発行者の方に紹介していただきます。

## 環音(わおん)

「小平・環境の会」は、東京都多摩地区の最終ごみ処分場である日の出町を描いた『水からの速達』という映画の上映会を開催したことをきっかけに、1995年に「環境を考える市民の会」として発足しました。その後、「NPO法人小平・環境の会」となりましたが、報告義務その他の煩雑さを避けるため、また任意団体に戻し、現在に至ります。会報『環音』は、NPO時代は年4回発行していましたが、現在は年2回程度の発行となっています。



・1997年「環境を考える市民の会・会報」創刊、2003年「環音」に改名。年2回発行、500部、A4判、4～8頁  
 ・会費：1000円/年(個人)  
 ・E-mail:kodaira\_kankyo@Jcom.zaq.ne.jp  
 ・当館所蔵：28～92号  
 ▽92号(2022年4月)内容=都市農業学習会「小平の農業を次世代へ」開催報告、今年の「忘れない3.11展」、コラム他。

## 月刊マルハバ

私たち「パレスチナの子どもの里親運動」(認定NPO法人)は、1984年9月の設立以来40年近くにわたり、中東のレバノンの難民キャンプで暮らすパレスチナ難民の子どもに生活費や学費の支援を続けています。

これまで支援してきた里子の数は1551人、現在支援している里子の数は161人です。里子と里親といっても、日本に呼び寄せるわけではなく、現地で家族と暮らす里子に、長期的に経済的・精神的な支援を続けてきました。レバノンの提携団体、バイト・アトファール・アツソムード

どを行っていません。また、小平市では水道水の一部に地下水が取り入れられていました。これにアメリカの基準値を大きく上回る有機フッ素化合物が混入していることが判明し、都が取水を止めました。現在では、「多摩地域の有機フッ素化合物(PFAS)汚染を明らかにする会」に協力し、市民の血液検査などもしています。会の役員も高齢化が進み、私たちの活動を担ってくださる役員を募集中です。ぜひ、関心のある方の応募をお待ちしております。(島 京子)



とのパートナーシップを通じて、毎月の支援を続けています。月刊『マルハバ』(アラビア語でこんにちは)の「表紙」は、おもに子どもたちの笑顔です。

子どもたちの様子が見られる「いま、里子たちは」では写真を中心に、現地での活動や催事の様子を紹介しています。「メディアが見るパレスチナ」では、パレスチナなどの情報をまとめてお伝えしています。2022年は現地スタッフのインタビューや、難民キャンプの様子がわかる動画を紙上に、連載記事にしました。コロナ禍のなか、子どもたちは勉強に取り組んできましたが、これまではなかった学習上の問題も現れ、現場のスタッフや職員の奮闘ぶりも伝わってきました。そのほか、現地からの緊急報告なども随時掲載しています。

最近では、中東や国際社会の、やさしい解説記事も好評です。昨年は円安のため月々の国際

送金を行う当団体の支出が急増しましたが、問題や情報をわかりやすく共有できました。会計・収支の情報も毎月掲載しています。一刻も早く円安が収まってほしいものです。

パレスチナの問題は長期化しており、パレスチナの難民は祖国から追い出されたまま70年以上、自分の家に帰れずにいます。ウクライナの難民への関心は世界的に高まっているのですが、パレスチナの人々のことが世界や日本で忘れられているのではと気がかかります。難民キャンプのあるレバノンも経済的に厳しい環境にあり、苦しい状態です。

日本も、コロナ禍に物価高で、大変な状況です。日々のことで精一杯で、毎月「マルハバ」を見てハッと里子たちのことを思うという声も聞きます。

このような厳しい状況ですが、だからこそ毎月の会報を大切に発行していきたいと思えます。(事務局・編集部 石河穂紀)

第4回 9月24日(土)

養沢(五日市)からのたより

―林業の現在とそらあけの会―

池谷キワ子さん(そらあけの会)  
岡田 誠さん(そらあけの会)  
ネットワーク市民アーカイブ

緑蔭トーク第8期を締めくくるのは、あき

る野市養沢で林業を営んでこられた池谷キワ子さんと、池谷さんの林地で活動をしている森林ボランティア「そらあけの会」メンバーで、市民アーカイブでもボランティアをしている岡田誠さんによるお話である。会場には池谷さんの林地でボランティア活動に参加されている方から林業にまつた関係のない方まで、幅広い参加があった。

▼養沢地域の林業

都心で生活していた池谷さんは、父の引退を機に林業を引き継ぐことになった。養沢はほとんど平地がなく、古くから林業が盛んで、周囲より早く人工林化が進んでいた地域である。かつて集落では薪炭を五日市で開かれていた市に出荷するなどして生計を立てていたが、1970年代をピークに材木価格は下落。その結果、多



くの人が都会に向かうことになり、山地は放棄される状態になってしまった。また、山林という場所は、現在もなお食物連鎖が成立

するような自然豊かな場所といえるが、林業で利益を生み出すことは難しくなり、経済の仕組みだけで山地を管理することは限界にきているようだ。けれども山林の自然環境を維持するためには、やはり林業が必要である。

人工林は手を入れないと建材にはならない。材木として出荷するには、今は70年ほど必要である。特に地拵え、植え付

けから20年くらいが、人間と同じで一番手がかかるといいう。池谷さんは林業家というよりも森林所有者、育林業という形で「そらあけの会」などのボランティアとともに自らの山の手入れをしてきた。

▼林業ボランティア

池谷さんのお話の合間に、「そらあけの会」でボランティアをしてきた岡田さんに話し手がバトンタッチして、ボランティアの立場からも林業について語っていただいた。初めは「林士戸」と名乗るグループが30年近く前に池谷家の山林でスタート。その後「そらあけの会」が発足して以来、23年間活動を続けていて、岡田さんも20年前から参加するようになった。「そらあけの会」は、山林で枝打ちや間伐などの作業をすることにより、空(視界)が明るくなる様子から名付けられたという。山仕事は危険がいっぱいで、事故や怪我のヒヤリハットがあり、メンバーの高齢化が進んでいることなどの課題を挙げつつも、メンバーの面々は林業ボランティア活動によって心と体の健康ももらっていると言語る。

▼林業の未来を見据えて

池谷さんも岡田さんも現在

2023年も開催します 第9期 緑蔭トーク

◆第1回 4月22日(土)

市民活動私の履歴書  
―ベ平連、声なき声の会、憲法の会、くらしうた研究会―

細田伸昭さん  
(市民のひろば・憲法の会/シビル)



◆第2回 5月27日(土)

「子ども食堂という」希望  
―食・居場所から地域づくりへおっが六鹿篤美さん(全国子ども食堂支援センター・むすびえ)



◆第3回 6月24日(土)

目録法の展開

―「目録」は世界への窓だった  
中井万知子さん  
(元国立国会図書館、日本図書館協会分類委員会)



◆第4回 9月23日(土)

市民が学び、考える歴史講座  
―自由民権カレッジの実践  
松崎 稔さん  
(町田市立自由民権資料館)



・会場…市民アーカイブ多摩(立川市幸町5の96の7 8頁地図) ☎042(536)5535  
・時間…午後4時15分〜6時  
・定員…30人(要申込) ・3000円  
・申込…☎042(396)2430

の日本の山林では林業は成り立たず、このままでは山が荒れてしまうと訴える。林業は3代続いてようやく成り立つもので、補助金などに頼るのでなく、何とか自力で経営できるようにしなければ林業の継続は難しい。

キワ子の名前は林業と関係なくつけられそうだが、常々「木は子ども」と主張してきたと語る池谷さん。木を育て、自然に触れるということは、人間以外の第三者に親しむというところでもあり、そのためには謙虚になることが求められることも語る。他人を知ることが

自分を知ることにも繋がる。このような人と人、人と自然の「関係」を大切にする林業の魅力を多くの人に知ってもらえるよう池谷さんは活動を続けている。(記・増沢航代表)

【参加者の感想から】

- ・小規模林家の考え、どうすべきか? どうしないといけないか問題点を見つけれられた。
- ・討論と意見交換の場が有意義。
- ・林業にたずさわる方の変容と大切さを学ばせてもらった。
- ・林業継続が経済的困難という話は、日本の施策のゆがみの深さを感じさせられた。
- ・林業の現場は見えにくく、子どもに伝えるのは難しいので、青年や大人に伝える方策を考えたい。



## 法政大学大原社会問題研究所 環境アーカイブズ

▼「1970～90年代のミニコミを見に行こう！」

「環境アーカイブズ」には、当会（ネットワーク・市民アーカイブ）が活動を始めるきっかけとなった「東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料」が保存されている。これら段ボール約550箱の資料を守ることから始まった当会の活動は、募金運動を展開する過程で環境アーカイブズと出会い、当初は資料を寄託、後に寄贈した。主



に2002年までの資料保存を「環境アーカイブズ」が、その後の資料の収集・公開を「市民アーカイブ多摩」が担っている。

今回は資料が①どのように保存・公開されているのかを見学し、②70～90年代の市民活動資料の閲覧を行った。

### ▼未来への資料保存

環境アーカイブズの閲覧室は法政大学多摩校舎総合棟の5階に位置する。閲覧者はリストから資料を探索し、職員が同建物の地下2階から現物を出納する。書庫内は温・湿度管理が行われ、チラシやミニコミなどの市民活動資料はファイルやホッチキスなど錆の心配がある金具等が外され、紙綴りで綴じ、中性紙封筒に封入、さらに中性紙箱に丁寧に保存

されていた。参加者からは、「手間がかかっている現場を見学できた」「保管環境の理想モデルを見学できた」「長期の保管・公開の準備ができたことを実感できた」「ミニコミをはじめ、地域で出された町会だよりなどの保存を呼びかけることはできないものか」などの感想が寄せられた。

### ▼時代を語る資料群

参加者から事前に見たい資料をリクエストしてもらい、閲覧した。当時のことを思い出して語り合う人や、全く知らない世代からは当時の活動の迫力への感嘆や質問などもあり、資料を通してその時代を語り合った。

参加者からは、「現物を見るということの大切さを感じた」「ミニコミ誌の資料群の迫力に圧倒された」「当時の多摩地区の市民の動きの一端に触れられた」「ばらばらに見える資料群も、それぞれの時期においては何らかのつながりがあるものとして意識され、その雑多さが市民がつくる世界への自画像としてむしろリアルであったことを、再認識した」などの感想が寄せられた。

### ▼閲覧した資料

今回閲覧できたのは、『草の根通信』『HiVoice』『テント村通信』『小金井市民の声』市民新聞』『小金井市民のくらしをつくる』『みんなの会ニュース』『遊撃 さかさのイシ』『モテない問題を考える会通信』『働くことと性差別を考える三多摩の会ニュース』『声なき声の会の通信』『こいがくぼ恋が窪公民館ミニコミグループ』『告知板 庄建設株式会社』『国民・住民投票を活かす会NEWS』他、多岐にわたる。



収集されている関連資料（ミニコミ・単行本）のタイトルなどは、環境アーカイブズHPの「公開資料（受入番号：0042）」に用意されたPDFファイルから知ることができる。

### ▼保存・活用の連携を

環境アーカイブズと市民

アーカイブ多摩にある資料は、その由来から相互に接続する関係にある。同一タイトルのミニコミについて、市民活動サービスコーナーが閉館した2002年以前は環境アーカイブズに、それ以降は市民アーカイブ多摩に、別々に収蔵されているものも多い。利用者が各機関での検索の際、相互の情報に分かる方法を考える必要性を改めて感じた。

環境アーカイブズからは、准教授の山本唯人さん、アーキビストの宇野淳子さん、リサーチ・アシスタント（RA）の加藤旭人さんが対応してくださった。保存の条件やご苦労について現場で知ることができ、活発な質疑を行う機会を得た。改めて感謝申し上げたい。

▽環境アーカイブズHP  
<https://k-archives.ws.hosei.ac.jp/>

（記録＝運営委員会）

# 市民アーカイブ多摩の資料棚から ⑬

## 〈学校教育〉

今回は、市民アーカイブ多摩の資料棚の中から分類番号73「学校教育」に配架されているものを紹介する。2020年3月に刊行された『よつこそ！市民アーカイブ多摩へ』の巻末に収録されている「ミニミニ目録」の73「学校教育」には55のミニミニコミが掲載されている。その中から、ある程度まとまった号数のあるものと特徴的なものを紹介しよう。なお号数の後の〈括弧内〉は発行年。

### 学校で起きている諸問題

『ともに 皆心一つに』

(学校安全ネット通信)は、学校における「いじめ」「暴力」「体罰」「差別」などの問題の相談に応じ、カウンセラー、弁護士、医師、教育研究者などの専門家がいっしょに解決策を考えるミニミニコミ。13年から『ともに 皆心一つに』を発行して20号を数えた後、19年よりNPO法人として新たに10号を数える。所蔵は1号〈13〉から20号〈18〉、法人化後は1号〈19〉から10号〈21〉



害児の親の会が発行。通級教室の設置を求めて教育委員会に働きかけた経緯がわかる。81号〈04〉から120号〈07〉所蔵。

『共学ネットさいたま通信』を発行する「共学ネット・さいたま」は、「全ての公立高校を共学校に」という考えのもと、「高校入試の際、男女別の志望者数の

と入試の現状など市民の多様な声を拾い上げる。所蔵は84号〈04〉から87号〈05〉。

『三多摩子育て・教育問題連絡会通信』は三多摩地区の都教組を中心にした通信で「地元の子供が入れる充実した高校を」「18歳選挙権」「定時制高校の存続」「戦争法の廃止」などをアピール。100号〈02〉から155号〈16〉を所蔵

### 多摩の学校給食を考える会

『ミニ通信』では「調理業務は民間委託ではなく現行の直営で」「調理員は人材派遣ではなく常勤職員で」「給食センター見学会」などの記事が載る。所蔵は5号〈12〉から10号〈13〉。

『夢パーク通信』は01年に成立した「川崎市子どもの権利に関する条例」をもとに川崎市が子どもの居場所、活動の拠点となるようにと作った施設「子ども夢パーク」のミニミニコミ。6号〈05〉から11号〈22〉を所蔵。

### 不登校・教育相談

『不登校新聞』(全国不登校新聞社)は1998年に創刊された不登校の専門紙。ミッションは「学校で苦しむ子供が安心して生きていける社会をつくる」

こと。不登校体験者や保護者の話、相談先、不登校時の居場所などを紹介。04年から16年は

『Force』の紙名で刊行。所蔵は81号〈01〉から79号〈22〉。

『東京・不登校を考える親の会通信』は、「登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク」を形成する一団体のミニミニコミで、交流の場として「東京シユール」がある。所蔵は235号〈08〉から332号〈18〉。

『さくら草の会通信』(国分寺市不登校を考える親の会)は、不登校・ひきこもりに係わってきた専門家などによる講演会の講演内容を掲載している。所蔵は4号〈04〉から196号〈20〉。

『教育相談室だより』(親と子と教職員の教育相談室)では今日の教育現場が直面する多様な問題について専門家による分析と対処法などを紹介している。毎号のスペシャルコンテンツは「子どものゲーム依存の実態と対処」(107号)、「教職員の働き方の現状と課題」(現場で何ができるのか) (108号)、「児童虐待と複雑性PTSD」(112号)、「あれから10年―福島の実状―」(113号)、「スクールロイヤーについて」(114号)など時宜を得たものが並ぶ。所蔵は55号〈07〉から116号〈22〉。

『まる・さんかく・しかく』(日野市不登校を考える親と子の会)は51号〈02〉から89号〈11〉を所蔵している。

### フリースクール・居場所等

不登校や若者の引きこもりといった社会現象は学校以外に子どもたちが安心していられる居場所や学びの場を提供しようという市民活動を生んだ。そこからフリースクールやフリースペースと呼ばれる場が提供されることになる。

『ゆきわたり』は子供問題研究会が文京区を本拠に集会や各地での合宿を行い、その成果を掲載する。72年以来続いており、B4判で毎号20頁を超えるポリウムがある。本誌12号の「ミニコミ紹介」で紹介。当館では362号〈05〉から553号〈22〉を所蔵。フリースクール「東京シユール」関係の資料としては、『東京シユール通信』『Tokyo Shure News』『シユール大学紀要』『東京シユール葛飾中学校関係資料』をわずかが所蔵している。

95年に設立されたオープンスペース「Be」の通信に『ちっちゃなBe!』の窓辺から』がある。所蔵は106号〈02〉から181号〈22〉まで。

また、川崎市子ども夢パーク内にある「フリースペースえん」の通信として『楽えんだより』(19号〈05〉)、『25号〈12〉』と『楽えんだより かわらばん』(30号〈05〉)、『253号〈21〉』および『たまり通信』(2010年夏号) 22

年夏号)を所蔵している。

その他に、地域に根差した都内ブリースクールのミニコミとして次のようなものを所蔵する。

世田谷区に本拠をおき、キャンプ・農作業などの体験を提供する「ブリースクール僕んち」が発行するミニコミ『今月のぼくんち』(07)22 / 国分寺市で生きづらさをかかえる子どもと家族に共に学ぶ場を提供する「NPO学びの広場」の『ひろばで』(02)12 / 日野市で不登校の子と親の居場所「スローライフスペースみちくさ」が発行する『みちくさ通信』(1号)02 / 16

### リレーエッセイ

〈市民アーカイブ多摩のひとつ〉③

## 作って、歌って、資料整理

堀内寛雄

資料調査スタッフ

市民活動資料室「市民アーカイブ多摩」にはどんな人が集っているのか。当番・ボランティア・利用者によるリレーエッセイ、開館日にぜひ会いに来てください!

一昨年、資料の増加に伴い、隣接する「岸中書庫」へ書架を増設する作業に着手しました。ひたすら手作業でネジを廻しながら

号(11)。

### 教育の自由を問う

少子化が進んだこの20〜30年は、行政が学校教育現場への介入を強めた期間でもあった。卒業式等における「日の丸・君が代」強制とそれに伴う大量処分や解雇が強行され、教科書検定や教科書採択でも教育現場よりも行政(教育委員会)側の意向を反映する動きが強まった。こうした動きに反発する形で「教育の自由」を求める市民活動も活性化された。こうした市民活動を知らためミニコミとしては次のようなものが当館に所蔵されている。

『ほうせんかー石川中裁判を支える会会報』(20号)04 / 42号(07) / 『河原井さん・根津さんらの「君が代」解雇をさせない会ニュース』(1号)06 / 29号(10) / 『二小を支える会ニュース』(8号)02 / 28号(05)の一部 / 『子どもと教科書ネット21 NEWS』(57号)07 / 14号(22) / 『子どもと教科書全国ネット21事務局通信』(52号)08 / 13号(22) / 『エデュカシオン エリベルテール 京・教育の自由裁判をすすめる会ニュース』(10号)08 / 66号(22) / 『子どもと生きる』(東京民研、220号)03 / 376号(21)

／『HB通信』(伴さんを支える会、4号)02 / 30号(05)の一部 / 『疋田教諭分限免職取消訴訟ニュース』(8号)08 / 19号(10)の一部 / 『ゆきやなぎーピースリボン裁判を支える会会報』(1号)04 / 17号(06)の一部 / 『ピアノ裁判関係資料』(日野「君が代」処分対策委員会)。

私は2020年まで30年以上にわたり神奈川県公立高校に勤務してきた。この間、少子化の進行・携帯電話やインターネットの普及・情報公開の進捗とそれに伴う個人情報保護の必要性の増大など、「学校教育」を取り巻く環境は大きく変化した。教育現場は予算と人の配置を軽視した場当たり的な教育行政により振り回されてきた感がある。ミニコミを通じてわかることは、地域社会に根差した市民活動がこうした矛盾の解消に立ち上がり、その空白を必死に埋めようとしてきたことである。学校教育周辺の市民活動とそれを記録するミニコミからは今後とも目が離せない。なお、今紹介したミニコミの内容・号数・発行年等目録を作成したので、必要な方はご連絡ください。(吉田明二会員・資料整理ボランティア)

部品を組み立てる日々が続きました。ようやく先が見えてきた矢先に、突如「電動ドライバー」なるものが登場して一気に作業がはかどり、あっけなく完成という事態に、しばし愕然としたものでした。

さて4年前から、32年間乗り続ける老朽かつ頑丈なマウンテンバイクを駆使して西国分寺から玉川上水に通い続けています。学生時代から、多摩地域東部内を転々と居住しながらも、地域の市民活動、住民運動に関わりがなかった者ですが、在職していた国立国会図書館(NDL)の先輩で、「住民図書館」の活



動や、当アーカイブの立ち上げにも尽力されていた平川千宏さんとの縁から、当アーカイブとの繋がりができました。

平川さん主宰の山歩きの会にも参加していた私は、自然とこちらの賛助会員となり、いつしか退職後には居住地からさほ

ど遠くない玉川上水の地で、資料整理のお手伝いをできればと思っていました。学生時代の「ミニコミ」、NDLでの職員組合青年部機関誌や「職場新聞」の刊行に関わったことなども背景にあったかと思えます。

現在、山梨平和ミュージアム(石橋湛山記念館)や市川房枝記念会女性と政治センターなどにも関わっています。これもNDL時代、特に憲政資料室での資料と人との縁から派生しています。蛇足ですが、平川さんとの繋がりが、NDL退職者が当アーカイブ会員の一定数を占めていることも付記しておきま

す。話は変わりますが、同世代の御多分に漏れず、高校のフォークソング部員だった私は、一方で「太郎(東海林)から聖子(松田)まで」をモットーに「昭和歌謡」にどっぷりと浸かってきました。この状況下、カラオケから遠ざかる日々が続いていましたが、ある開室当番の日に岡田誠さんと山口真理子さんとともに、何の拍子か、霧島昇や橋幸夫などの唄を復唱する羽目となり、久しぶりの発声練習ができたのでした。

(ほりうち・ひろお)主に水曜開館日に資料整理・調査担当

# アーカイブ多摩 日記

## ◇2023会員継続・新規入会、年度末カンパのお願い

4月から新年度が始まります。会員の継続と新規ご入会をよろしく願います。ご一緒に市民活動資料の収集・保存活動を支えてください。開館当番や資料整理、運営委員会等、ボランティアで行っておりますが、赤字会計が続いております。年度末カンパもどうぞよろしくお願いたします。

## ◇運営委員・部会員募集

2023年度が始まります。会の運営全般を検討する運営委員（会議は毎月第3金曜日夜）と3つの部会（資料部会・資料全般について検討、広報部会・主に『アーカイブ通信』製作や広報活

動について検討、企画部会・催し内容などを検討）のメンバーを集めています（会議は随時）。ぜひ、あなたの知恵を貸してください！

## ◇多摩地域図書館調査

新たな目録づくりを考えるにあたり、多摩地域公共図書館などの市民活動資料（主にミニコミ）の収集・保存の実態についてプレ調査を行いました。自治体によって大きな差があり、市民活動資料が後世にも語り得る重要な資料であることを、今後も言語化していく必要性を感じました。

## ◇春の樹林開放日は3月19日

当館がある緑地でマンドリンコンサートが開催されます。こぶしやモクレン、春の花を楽しみにご参加ください。午後2時〜。

## 運営委員会など

10月21日 第7回運営委員会、参加者6人。会員・カンパ者、当番確認、来館者報告、各部会からの報告（以下毎回）。緑蔭トーク反省、現場を訪ねる・目録づくり集会2、『アーカイブ通信』27号、23年度緑蔭トーク講師案等検討。  
11月18日 第8回運営委員会、参加者6人。多摩地域図書館調査中間報告、23年度緑蔭トーク・総会講師・日程等、長期計画の必要性等検討。ハイブリッド開催試行。  
11月26・27日 第8回現場を訪ねる（福島）開催。参加者12人。  
12月16日 第9回運営委員会、参加者4人。現場を訪ねる反省、23年緑蔭トーク講師決定、23年総会・講演会内容と講師・会場、目録づくり集会2、年賀状案、『通信』27号等検討。ハイブリッド開催。  
1月21日 第10回運営委員会、参加者6人。目録づくり集会2当日分担、23年総会準備、22年活動振り返り、総会講演会内容と会場、年賀状共有、『通信』28号企画案等検討。

## 会員数（2023年1月）

165（正会員62人

賛助会員98人・5団体）

◆新規入会ありがとう

賛助会員 佐藤 純さん

## カンパありがとう

（2022年10月〜23年1月）

春日作太郎さん、中村光一さん、堀内寛夫さん、鷲尾真由美さん、マスコミ・文化九条の会 所沢

## 年賀状から（抜粋）

・多摩地域の中で拠点をもち、維持する努力の継続に拍手。  
・書庫も拡大し、順調に活動されているようで嬉しいです。  
・小金井市立図書館所蔵のミニコミ誌（158タイトル）の調査を完了しました。  
・里親の日（10月4日）と翌日、駅前「里親制度啓発キャンペーン」ののぼり旗活動をしました。  
・何よりも平和を！ 頼みの綱はしっかりと民主的住民自治を構築していくことだと思います。  
・なんとという物凄い1年を過ごしたものでしょう。昨年を振り返り「愚」という字を選びました。

・東ジャワから農園の手伝いに4人の若者がやってきてくれました。ジャカルタでの暮らしを懐かしむだけでなく繋げていきたいです。  
・世界中の全ての子どもたちがのびやかに育つことができそうです。大人たちは、そのために手を取って協力しあう立場にある、と思うのですが…。

## 編集後記

時代のスピードについていけない。朝ドラ「舞いあがれ」のまいちゃん（福原遥は、まだ夜ドラ「正直不動産」の月下さんだし、父の高橋克典はミネルヴァ不動産の悪徳社長だし。つまり次の情報が入ってこない。困った。（増鈴・江佐）



## 【市民アーカイブ多摩利用案内】

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日（年末年始・8月中旬休館有）
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-9 6-7  
（多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分）
- ・tel・fax：042-536-5535（電話は開館中のみ）
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ（通信や会報など）2,000タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。  
[www.c-archive.jp](http://www.c-archive.jp)

